

なめとこ山の熊

宮沢賢治



なめとこ山の熊くまのことならおもしろい。なめとこ山は大きな山だ。淵沢川ふちざわはなめとこ山から出て来る。なめとこ山は一年のうち大てい日はつめたい霧か雲かを吸ったり吐いたりしている。まわりもみんな青黒いなまこや海坊主のような山だ。山のなかごろに大きな洞穴ほらあなががらんとあいている。そこから淵沢川がいきなり三百尺ぐらいの滝になってひのきやいたやのしげみの中をごうと落ちて来る。

中山街道はこのごろは誰たれも歩かないから路ふきやいたどりがいっぱいにに生えたり牛が遁にげて登らないように柵さくをみちにたてたりしているけれどもそこをがさがさ三里ばかり行くと向うの方で風が山の頂を通っているような音がする。気をつけてそつちを見るとと何だかわけのわからない白い細長いものが山をうごいて落ちてけむりを立てているのがわかる。それがなめとこ山の

空滝だ。そして昔はそのへんには熊がごちやごちや居たそうだ。ほんとうはなめとこ山も熊の胆いも私は自分で見たのではない。人から聞いたり考えたりしたことばかりだ。間ちがつているかもしれないけれども私はそう思うのだ。とにかくなめとこ山の熊の胆いは名高いものになっている。

腹の痛いのにもきけば傷もなおる。鉛の湯の入口になめとこ山の熊の胆いありという昔からの看板もかかっている。だからもう熊はなめとこ山で赤い舌をべろべろ吐いて谷をわたったり熊の子供らがすもうをとっておしまいなぐばか撲りあつたりしていることはたしかだ。熊捕りの名人の淵沢小十郎がそれを片っぱしから捕つたのだ。

淵沢小十郎はすがめのあかぐろ赭黒いごりごりしたおやじで胴は小さなうす白ぐらいはあつたしてのひら掌は北島のびしゃもん毘沙門さんの病気をなおすた

めの手形ぐらい大きく厚かった。小十郎は夏なら菩提樹マダの皮でこさえたけらを着てはむばきをはき生蕃せいばんの使うような山刀とポルトガル伝来というような大きな重い鉄砲をもつてたくましい黄いろな犬をつれてなめとこ山からしどけ沢から三つ又からサツカイの山からマミ穴森から白沢からまるで縦横にあるいた。木がいつぱい生えているから谷を溯のぼつているとまるで青黒いトンネルの中を行くようです時にはぱつと緑と黄金きんいろに明るくなることもあればそこら中が花が咲いたように日光が落ちていともある。そこを小十郎が、まるで自分の座敷の中を歩いているといふふうでゆつくりのつしのつしとやつて行く。犬はさきに立つて崖がけを横よこ這いに走ったりぎぶんと水にかけ込んだり淵のろのろした気味の悪いところをもう一生けん命に泳いでやつと向うの岩にのぼるとからだをぶるぶるつとして毛をたてて水を

ふるい落しそれから鼻をしかめて主人の来るのを待っている。小十郎は膝ひざから上にまるで屏風びょうぶのような白い波をたてながらコンパスのように足を抜き差しして口を少し曲げながらやって来る。そこであんまり一ぺんに言ってしまったて悪いけれどもなめとこ山あたりの熊は小十郎をすきなのだ。その証拠には熊どもは小十郎がぼちやぼちや谷をこいだり谷の岸の細い平らないつぱいにあざみなどの生えているところを通るときはだまって高いところから見送っているのだ。木の上から両手で枝にとりついたり崖の上で膝をかかえて座つたりしておもしろそうに小十郎を見送っているのだ。まったく熊どもは小十郎の犬さえずきなようだった。けれどもいくら熊どもだつてすつかり小十郎とぶつつかつて犬がまるで火のついたまりのようになつて飛びつき小十郎が眼めをまるで変に光らして鉄砲をこつちへ構えることはあ

んまりすきではなかつた。そのときは大ていの熊は迷惑そうに手をふつてそんなことをされるのを断わつた。けれども熊もいろいろだから気の烈はげしいやつならごうごう咆ほえて立ちあがつて、犬などはまるで踏みつぶしそうにしながら小十郎の方へ両手を出してかかつて行く。小十郎はびつたり落ち着いて樹きをたてにして立ちながら熊の月の輪をめぐけてズドンとやるのだった。すると森までががあつと叫んで熊はどたつと倒れ赤黒い血をどくどく吐き鼻をくんくん鳴らして死んでしまうのだった。小十郎は鉄砲を木へたてかけて注意深くそばへ寄つて来てこう言うのだった。

「熊。おれはてまえを憎くて殺したのでねえんだぞ。おれも商売ならてめえも射うたなけあならねえ。ほかの罪のねえ仕事していんだが畑はなし木はお上のものにきまつたし里へ出てたれも誰も

相手にしねえ。仕方なしに猟師なんぞしるんだ。てめえも熊に生れたが因果ならおれもこんな商売が因果だ。やい。この次には熊なんぞに生れなよ」

そのときは犬もすつかりしよげかえって眼を細くして座つていた。

何せこの犬ばかりは小十郎が四十の夏うち中みんな赤痢にかかってとうとう小十郎の息子とその妻も死んだ中にびんびんして生きていたのだ。

それから小十郎はふところからとぎすまされた小刀を出して熊の顎あごのそこから胸から腹へかけて皮をすうつと裂いていくのだった。それからあとの景色は僕は大きらいだ。けれどもとにかくおしまい小十郎がまつ赤な熊の胆いをせなかの木のひつに入れた血で毛がぼとぼと房になつた毛皮を谷であらつてくるくる

まるめせなかにしよつて自分もぐんなりした風で谷を下つて行くことだけはたしかなのだ。

小十郎はもう熊のことばだつてわかるような気がした。ある年の春はやく山の木がまだ一本も青くならないころ小十郎は犬を連れて白沢をずうつとのぼつた。夕方になつて小十郎はぼつかい沢へこえる峯みねになつた処ところへ去年の夏こさえた笹小屋ささごやへ泊ろうと思つてそこへのぼつて行つた。そしたらどういふ加減か小十郎の柄にもなく登り口をまちがつてしまつた。

なんべんも谷へ降りてまた登り直して犬もへとへとにつかれ小十郎も口を横にまげて息をしながら半分くずれかかつた去年の小屋を見つけた。小十郎がすぐ下に湧水わきみずのあつたのを思い出して少し山を降りかけたら愕おどろいたことは母親とやつと一歳になるかならないような子熊と二疋ひきちようど人が額ひきに手をあてて遠

くを眺^{なが}めるといったふうに淡い六日の月光の中を向うの谷をしげしげ見つめているのにあつた。小十郎はまるでその二疋の熊のからだから後光が射すように思えてまるで釘^{くぎ}付けになつたように立ちどまつてそつちを見つめていた。すると小熊が甘えるように言つたのだ。

「どうしても雪だよ、おつかさん谷のこつち側だけ白くなつて
いるんだもの。どうしても雪だよ。おつかさん」

すると母親の熊はまだしげしげ見つめていたがやつと言つた。
「雪でないよ、あすこへだけ降るはずがないんだもの」

子熊はまた言つた。

「だから溶けないで残つたのでしよう」

「いいえ、おつかさんはあざみの芽を見に昨日あすこを通つた
ばかりです」

小十郎もじつとそつちを見た。

月の光が青じろく山の斜面を滑っていた。そこがちょうど銀の鎧よろいのように光っているのだった。しばらくたつて子熊が言った。

「雪でなけあ霜だねえ。きつとそうだ」

ほんとうに今夜は霜が降るぞ、お月さまの近くで胃コキエもあんなに青くふるえているし第一お月さまのいろだつてまるで氷のようだ、小十郎がひとりで思った。

「おかあさまはわかったよ、あれねえ、ひきざくらの花」

「なあんだ、ひきざくらの花だい。僕知ってるよ」

「いいえ、お前まだ見たことありません」

「知ってるよ、僕この前とつて来たもの」

「いいえ、あれひきざくらであります、お前とつて来たのき

ささげの花でしょう」

「そうだろうか」子熊はとぼけたように答えました。小十郎はなぜかもう胸がいつぱいになつてもう一ぺん向うの谷の白い雪のような花と余念なく月光をあびて立つてゐる母子の熊をちらつと見てそれから音をたてないようにこつそりこつそり戻りはじめた。風があつちへ行くな行くなと思ひながらそろそろと小十郎は後退あとずさりした。くろもじの木の匂においが月のあかりといつしよにすうつとさした。

ところがこの豪儀な小十郎がまちへ熊の皮と胆きもを売りに行くときのみじめさといつたら全く気の毒ざるだつた。

町の中ほどに大きな荒物屋があつてざる笹ざるだの砂糖だの砥石といしだの金天狗きんてんぐやカメレオン印の煙草たばこだのそれから硝子ガラスの蠅はえとりまでな

らべていたのだ。小十郎が山のように毛皮をしよつてそのしきいを一足またぐと店では又来たかというようにうすわらつてゐるのだつた。店の次の間に大きな唐金からかねの火鉢ひぼちを出して主人がどつかり座つていた。

「旦那だんなさん、先せんころはどうもありがどうごあんした」

あの山では主のような小十郎は毛皮の荷物を横におろして町ねいに敷板に手をついて言うのだつた。

「はあ、どうも、今日は何のご用です」

「熊の皮また少し持つて来たます」

「熊の皮か。この前のもまだあのまましまつてあるし今日あまんついています」

「旦那さん、そう言わないでどうか買つて呉くんなさい。安くてもいいいます」

「なんぼ安くても要らないです」主人は落ち着きはらつてきせるをたんたんとてのひらへたたくのだ、あの豪気な山の中の主の小十郎はこう言われるたびにもうまるで心配そうに顔をしかめた。何せ小十郎のここでは山には栗くりがあつたしうしろのまるで少しの畑からは稗ひえがとれるのではあつたが米などは少しもできず味噌みそもなかつたから九十になるとしよりと子供ばかりの七人家内にもつて行く米はごくわずかずつでも要つたのだ。

里の方のものなら麻もつくつたけれども、小十郎のとはわすか藤ふじつるで編む入れ物の外に布にするようなものはなんにも出来なかつたのだ。小十郎はしばらくたつてからまるでわがれたような声で言つたもんだ。

「旦那さん、お願いです。どうが何ほでもいいはんで買って呉くない」小十郎はそう言いながら改めておじぎさえしたもんだ。

主人はだまつてしばらくけむりを吐いてから顔の少しでにかにか笑うのをそつとかくして言つたもんだ。

「いいいます。置いてお出れ。じゃ、平助、小十郎さんき二円あげろじゃ」

店の平助が大きな銀貨を四枚小十郎の前へ座つて出した。小十郎はそれを押しただくようにしてにかにかしながら受け取つた。それから主人はこんどはだんだん機嫌がよくなる。

「じゃ、おきの、小十郎さんき一杯あげろ」

小十郎はこのころはもううれしくてわくわくしている。主人はゆつくりいろいろ談はなす。小十郎はかしまつて山のもようや何か申しあげている。間もなく台所の方からお膳ぜんできたお知らせ。小十郎は半分辞退するけれども結局台所のとこへ引っぱられてつてまた町寧あいさつな挨拶あいさつをしている。

間もなく塩引の鮭さけの刺身やいかの切り込みなどと酒が一本黒い小さな膳ぜんにのつて来る。

小十郎はちやんとかしくまつてそこへ腰掛けていかの切り込みを手の甲うでにのせてべろりとなめたりうやうやしく黄いろな酒を小さな猪口ちよこについだりしている。いくら物価の安いときだつて熊の毛皮二枚で二円はあんまり安いと誰たれでも思う。実に安いしあんまり安いことは小十郎でも知っている。けれどもどうして小十郎はそんな町の荒物屋なんかへでなしにほかの人へどしどし売れないか。それはなぜか大ていの人にはわからない。けれども日本では狐きつねけんというものもあつて狐は獵師に負け獵師は旦那に負けるときまつている。ここでは熊は小十郎にやられ小十郎が旦那にやられる。旦那は町の中なかのみんなの中なかにいるからなかなか熊に食くわれない。けれどもこんないやなずるいやつらは

世界がだんだん進歩するとひとりで消えてなくなつていく。僕はしばらくの間でもあんな立派な小十郎が二度とつらも見たくないようないやなやつにうまくやられることを書いたのが実にしやくにさわつてたまらない。

こんなふうだったから小十郎は熊どもは殺してはいても決してそれを憎んではいなかったのだ。ところがある年の夏こんなようなおかしなことが起つたのだ。

小十郎が谷をばちやばちや涉わたつて一つの岩にのぼつたらいきなりすぐ前の木に大きな熊が猫ねこのようにせなかを円くしてよじ登つてゐるのを見た。小十郎はすぐ鉄砲をつきつけた。犬はもう大悦おおよろこびで木の下に行つて木のまわりを烈はげしく馳はせめぐつた。すると樹の上の熊はしばらくの間おりて小十郎に飛びかかる

うかそのまま射^うたれてやろうか思案しているらしかったがいきなり両手を樹からはなしてどたりと落ちて来たのだ。小十郎は油断なく銃を構えて打つばかりにして近寄って行つたら熊は両手をあげて叫んだ。

「おまえは何がほしくておれを殺すんだ」

「ああ、おれはお前の毛皮と、胆きまものほかにはなんにもいらぬ。それも町へ持って行ってひどく高く売れるというのではないしほんとうに気の毒だけれどもやつぱり仕方ない。けれどもお前に今ごろそんなことを言われるともうおれなどは何か栗かしたのみでも食つていてそれで死ぬならおれも死んでもいいような気がするよ」

「もう二年ばかり待ってくれ、おれも死ぬのはもうかまわぬようなもんだけれども少しし残した仕事もあるしただ二年だけ

待つてくれ。二年目にはおれもおまえの家の前でちゃんと死んでいてやるから。毛皮も胃袋もやってしまふから」

小十郎は変な気がしてじつと考えて立つてしまいました。熊はそのひまに足うらを全体地面につけてごくゆつくりと歩き出した。小十郎はやつぱりぼんやり立っていた。熊はもう小十郎がいきなりうしろから鉄砲を射つたり決してしないことがよくわかつてるといふふうでうしろも見ないでゆつくりゆつくり歩いて行つた。そしてその広い赤黒いせなかが木の枝の間から落ちた日光にちらつと光つたとき小十郎は、う、うとせつなそうにうなつて谷をわたつて帰りはじめた。それからちようど二年目だったが、ある朝小十郎があんまり風が烈しくて木もかきねも倒れたらうと思つて外へ出たらひのきのかきねはいつものようにかわりなくその下のところに始終見たことのある赤黒いもの

が横になつていたのでした。ちようど二年目だしあの熊がやつて来るかと少し心配するようになっていたときでしたから小十郎はどきつとしてしまいました。そばに寄つて見ましたらちやんとあのこの前の熊が口からいっぱいに血を吐いて倒れていた。小十郎は思わず拝むようにした。

一月のある日のことだった。小十郎は朝うちを出るときいままで言つたことのないことを言つた。

「婆さま、おれも年老つたでばな、今朝まず生れで始めて水へ入るの嫌やんたよな氣するじゃ」

すると縁側の日なたで糸を紡いでいた九十になる小十郎の母はその見えないような眼をあげてちよつと小十郎を見て何か笑うか泣くかするような顔つきをした。小十郎はわらじを結えて

うんとこさと立ちあがつて出かけた。子供らはかわるがわるうまやの前から顔を出して「爺じさん、早くお出でや」と言つて笑つた。小十郎はまっ青なつるつるした空を見あげてそれから孫たちの方を向いて「行つて来るじやい」と言つた。

小十郎はまっ白な堅雪の上を白沢の方へのぼつて行つた。

犬はもう息をはあはあし赤い舌を出しながら走つてはとまり走つてはとまりして行つた。間もなく小十郎の影は丘の向うへ沈んで見えなくなつてしまひ子供らは稗ひえの藁わらでふじつきをして遊んだ。

小十郎は白沢の岸を溯のぼつて行つた。水はまっ青に淵ふちになつたガラス硝子板をしいたように凍つたりつららが何本も何本もじゅずのようになつてかかつたりそして両岸からは赤と黄いろのまゆ

みの実が花が咲いたようにのぞいたりした。小十郎は自分と犬との影法師がちらちら光り樺かばの幹の影といっしょに雪にかつきり藍あいいろの影になつてうごくのを見ながら溯つて行つた。

白沢から峯を一つ越えたところに一疋の大きなやつが棲すんでいたのを夏のうちにたずねておいたのだ。

小十郎は谷に入つて来る小さな支流を五つ越えて何べんも何べんも右から左左から右へ水をわたつて溯つて行つた。そこに小さな滝があつた。小十郎はその滝のすぐ下から長根の方へかけてのぼりはじめた。雪はあんまりまばゆくて燃えているくらい。小十郎は眼がすっかり紫の眼鏡めがねをかけたような気がして登つて行つた。犬はやつぱりそんな崖がけでも負けないというようにたびたび滑りそうになりながら雪にかじりついて登つたのだ。やつと崖を登りきつたらそこはまばらに栗の木の生えたごくゆるい

斜面の平らで雪はまるで寒水石という風にギラギラ光っていた。しまわりをずうつと高い雪のみねがによきによきつつたっていた。小十郎がその頂上でやすんでいたときだ。いきなり犬が火のついたように咆ほえ出した。小十郎がびっくりしてうしろを見たらあの夏に眼をつけておいた大きな熊が両足で立ってこつちへかかつて来たのだ。

小十郎は落ちついて足をふんばって鉄砲を構えた。熊は棒のような両手をびっこにあげてまっすぐに走って来た。さすがの小十郎もちよつと顔いろを変えた。

ぴしゃというように鉄砲の音が小十郎に聞えた。ところが熊は少しも倒れないで嵐あらしのように黒くゆらいでやって来たようだった。犬がその足もとに噛かみ付いた。と思うと小十郎はがあんと頭が鳴ってまわりがいちめんまつ青になった。それから遠くで

こう言うことばを聞いた。

「おお小十郎おまえを殺すつもりはなかった」

もうおれは死んだと小十郎は思った。そしてちらちらちら青い星のような光がそこらいちめんに見えた。

「これが死んだしるしだ。死ぬとき見る火だ。熊ども、ゆるせよ」と小十郎は思った。それからあとの小十郎の心持はもう私にはわからない。

とにかくそれから三日目の晩だった。まるで氷の玉のような月がそらにかかっていた。雪は青白く明るく水は^{りんこう}燐光をあげた。すばるや^{しん}参の星が^{だいたい}緑や橙にちらちらして呼吸をするように見えた。

その栗の木と白い雪の峯々にかこまれた山の上の平らに黒い大きなものがたくさん^わ環になつて集つて各々黒い影を置き^{フイフイ}回々

教徒の祈るときのようにじつと雪にひれふしたままいつまでもいつまでも動かなかつた。そしてその雪と月のあかりで見るといちばん高いところに小十郎の死骸しがいが半分座つたようになって置かれていた。

思いなしにその死んで凍えてしまつた小十郎の顔はまるで生きてるときのように冴さえ冴ざえして何か笑つているようにさえ見えただのだ。ほんとうにそれらの大きな黒いものは参の星が天のまん中に来てももつと西へ傾いてもじつと化石したようにうごかなかつた。

なめとこ山の熊

底本：「風の又三郎」角川文庫、角川書店
1988（昭和 63）年 12 月 10 日初版発行
1990（平成 2）年 10 月 20 日 8 版発行

入力：土屋隆

校正：noriko saito

2005 年 6 月 15 日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。